

カリフォルニアの思い出

和田 章

新宿の賑やかさは日本の戦後の復興の原動力だったと思う。その隣の久保駅をおりて進行方向に少し歩くと建築研究所があった。目的の建物に行くのに途中の建物の階段を上ってまた降りてという戦前の建物のおいの残った古びた研究所であったが、日本の建築の復興のやはり原動力として大活躍した研究所だと思ふ。武藤 清先生の始められたトレセンも動いていて、国際的な活動拠点としてのモダンな雰囲気もあった。住宅公団の壁式アパートを丸ごと建てて実大実験をしていたことなど、今でも意欲的な研究が行われていたと思う。実際の設計上の悩み事の相談に訪れる構造設計者も沢山いた。

ここで尾崎昌凡先生にはじめてお会いしたのは、建物のねじれの問題の相談に伺ったときだと思ふ。もちろん、宮城県沖地震（1978年6月）の起きる前のことである。この地震のあと、建設省は十四号通達をだし、建築物の高さ方向の剛性と重量の釣合の良い建築、平面的にねじれの起きにくい建築を目指した構造設計を促した。これを引き継いだ新耐震設計法は、剛性率、偏心率として条文化され、弾性剛性を根拠に計算することになっている。ただ、十四号通達はもう少しアバウトな方法であり、強度にも注目したより良い方法であったように思ふ。

尾崎先生は千葉大学に移られたのちも、高さ方向にも平面的にも釣合の良い建築物を作るべきと、研究を続けられ曾田五月也先生らとご一緒に頻りに勉強会を開いていて、小生もメンバーに入れていただいた。英文の論文を次々に書かれ、その度に送って戴いた。最も重要な主張は、初期剛性を用いた現行の方法ではねじれの現象を正しくとらえることはできず、各構面の耐力も考慮すべきだということである。構造物の塑性変形を許容している耐震設計法の中で、初期剛性のみを用いる方法には無理があると小生も感じる。

尾崎先生は米国にも知己が沢山いて、JSCA（日本建築構造技術者協会）と米国 ATC（Applied Technology Council）が2年ごとに開いている日米会議では本当にお世話になった。箱根、ハワイ、サンディエゴ、サンフランシスコ、バンクーバーなど、思い出は沢山あるが、サンフランシスコの会議のあと、夜行便でシカゴに向かう前に Union Square の近くのステーキハウスでご馳走になり、Powell の坂道を上って右側にあるホテル（Sir Francis Drake Hotel）の最上階のバーでカクテルもご馳走になった。尾崎先生がカリフォルニア大学に留学されていたお若き頃、米国人の女性にとってもおもてになったとのことで、何度もここでデートしたと自慢されていた。

尾崎昌凡先生は、我々その次に続く我国の耐震工学の国際交流の道筋を開いていただいた先生です。ご冥福をお祈りします。皆様もサンフランシスコに行かれたとき、このバーを訪ねて、往時の尾崎先生を思い出して戴きたい。

A 360-degree view from the 21st floor of Sir Francis Drake Hotel makes Harry Denton's Starlight Room one of San Francisco's most spectacular destinations. Sip well-crafted cocktails while enjoying brilliant sunsets or rolling fog, twinkling city lights and landmarks from Telegraph Hill to the Bay Bridge.

